

あいらの歴史と物語

蒲生氏入部900年記念 史跡巡り竜ヶ城（蒲生城）を歩く

始良市教育委員会 社会教育課文化財係 福丸 雅也

令和5年(2023)は、蒲生の地を長らく治めた蒲生氏が入部して900年目となります。この節目の年にあたり、市教育委員会では始良歴史ボランティア協会との共催で「竜ヶ城（蒲生城）を歩く」と題した史跡巡りを、去る11月25日(土)に実施しました。

豊前国宇佐八幡の留守職(神社の管理職)であった父・藤原教清と、官司の娘である母との間に生まれた上総介舜清は、保安元年(1120)社領のあった垂水に下向しました。その後保安4年(1123)に蒲生へ移り、地名にちなみ蒲生氏を名乗ったといわれます。

初代舜清は蒲生城を築城し、宇佐八幡を勧請して正八幡若宮(現・蒲生八幡神社)を創建。その後一族は島津氏との戦に敗れて退去するまで、18代・430年以上もの長きに渡りこの地を治めました。

今回の史跡巡りは、蒲生氏が本城とし、難攻不落の名城と謳われた蒲生城をメインに実施しました。蒲生城は、前郷川南岸の標高約162mの竜ヶ山に築かれ、周囲は約8キロにも及ぶ県内有数の大規模な山城です。城の形が、竜が爪を立てて躍りかかろうとする姿に似ていることから「竜ヶ城」とも呼ばれます。

山城には敵を迎え撃つために、各所に兵士を配置する「曲輪」と呼ばれる陣地がありますが、蒲生城では実に30もの曲輪が存在します。また、一般に城の中心をなすエリアを本丸、その外側を二ノ丸、更に外側を三ノ丸と呼び、段階的な階層構造となっています。

史跡巡り当日の朝は強い冷え込みがありましたが、雲のない爽やかな秋晴れで、29名の方が参加しました。

蒲生総合支所をマイクロバスで出発すると、林道を上り城山公園駐車場で下車。蒲生市街地を一望できる二ノ丸跡、山頂に位置する本丸跡と城内を散策し、それから急な崖面をスリリングに下って市の指定史跡・竜ヶ城磨崖一千梵字に至るというルートを歩きました。幸い途中ケガ人などもなく、全員無事に予定していた行程を完歩することができました。蒲生氏の始まりからその終焉まで、蒲生を守護する本城として在り続けた蒲生城。築城から900年となる記念すべき年に、悠久の歴史に想いを馳せながら史跡を巡った思い出深い一日となりました。



竜ヶ城散策の様子

川内の史跡研修

令和5年11月9日に、薩摩川内市で史跡研修を実施し約15カ所を見学しました。川内はかつて薩摩国の中心であり交通の要衝として繁栄しました。国府や国分寺のほか、薩摩国一之宮である新田神社、豊臣秀吉と島津義久の和睦地である泰平寺、薩摩藩最大の久見崎軍港もあり、古代・中世には政治・文化の拠点としての様々な機能が備わっていました。

平佐焼と北郷家

橘木 雅晴

天辰町皿山に所在する平佐窯は、平佐領主9代北郷久陣が天草や肥前から陶工を呼び寄せ築かせた磁器窯です。天明年間(1781~89)の頃に創業を開始し、日用品から美術品まで多彩な焼物が生産されました。原材料は天草陶石と地元の白色粘土を混ぜたものでした。釉薬はイスノキの皮灰で、青味がかかった色が平佐焼の特徴であり、藩内の磁器生産の中心地でした。

始良市の弥勒窯や重富皿山窯、日木山窯でも磁器生産が行われましたが、天草陶石の運搬が障害となって永続しませんでした。

その後、平佐焼は色絵や鼈甲焼きを導入し珍重されましたが、明治4年(1871)の廃藩置県で北郷家の支援を失いました。昭和2年(1927)には鹿児島本線鉄道開通により、大量の肥前陶器が県内に流入して不振に陥り、昭和16年(1941)を最後に廃絶してしまいました。



平佐焼窯跡

実秀法印の墓

玉利 良一

実秀法印は、薩摩茶発祥の寺として著名な吉松般若寺の住職を務めていましたが、慶長9年(1604)島津義弘の命により始良市蒲生町の千手院の第二世住職や、薩摩藩2代藩主島津光久の代に薩摩川内市の医王山正智院泰平寺の第七世住職に就任しました。さらに、薩摩国の国分寺や国府天満宮を再建した名僧で、蒲生の千手院跡には自身の三十三回忌を供養する逆修塔が建立されています。

研修の下見で、泰平寺にある実秀法印の墓を探し当てた時の喜びは、正に始良市と薩摩川内市の時間的・空間的な絆を実感させられるものでした。

なお、実秀法印の墓に入寂年は正徳6年(1716)とあります。吉松般若寺の住職になってから100年以上も経過していることになり、同一人物なのかなどの疑問が残ります。



泰平寺 実秀法印の墓

特別展「森と生きた縄文人」－前田遺跡発掘調査成果展－

始良市教育委員会 社会教育課文化財係 深野 信之

始良市住吉の前田遺跡で最も注目された調査成果は、縄文時代中期後半（今から約4,500年前）の低湿地遺跡で見つかったドングリ貯蔵穴群で、県内初となる14点の編みかごと、11万点を超える生のドングリが出土しました。



編みかごは水分を多く含み非常にもろいため、高級アルコール法という特殊な保存処理を行うことで展示が可能になりました。つる性植物（ウドカズラやテイカカズラなど）やイチイガシを木目に沿って薄く剥いだへぎ材で編まれた編みかごは、縄文人たちの技術水準の高さを生き生きと伝えてくれています。

一方、ドングリは99%以上がイチイガシです。イチイガシは編みかごの素材でもあり、前田遺跡の縄文人にとって、実も幹も利用価値の高い植物であったことがわかります。4,500年という年月を感じさせないドングリの状態に、観覧者は驚かれていたようです。

また、特別展の関連イベントとして、全国の編みかご出土遺跡を調査・研究している「あみもの研究会」の協力のもと、編みかごの復元製作を行いました。3点の編みかごを縄文時代と同じ素材・技

術で復元するために、素材採取・調整など準備を進めてきましたが、その過程で「どこに素材が生息しているか？」から始まり、「質や寸法の整った素材を大量に確保できるか？」など、さまざまな課題にぶつかりました。この経験から、縄文人が常日頃から身の回りの森を管理し、素材の生息地や採取時期などを正確に把握していたことを身に染みて感じることができました。1万年以上続いた縄文人の世界は深遠です。



佐々木特任教授（金沢大学）による編みかご復元製作の解説

「コロナ禍からの飛躍」～令和5年の活動を振り返って～

始良歴史ボランティア協会 宮内 伸一

「コロナ禍」に見舞われた4年間で過ぎ、令和5年度は新しいスタートの年になりました。新しく協会に加入した3名の方々の応援も得て、15名の会員が歴史ボランティア活動に全力で取り組んだ1年でした。

私たちの活動内容は、自己研鑽に努めるための研修会の企画や実践、史跡めぐりの開催、史跡ガイドの実施、始良市歴史民俗資料館の展示解説や企画展及び体験活動への協力、文化財等の巡回点検や清掃活動などで、すべての面で充実した活動ができたのではないかと思います。

特に今年度は、自分たちの資質向上のために、毎月1回実施する定例会後に研修の時間を設定し、始良市内の文化財について理解を深めました。また、研修視察として、鹿児島城跡や薩摩川内市内の文化財を訪問したりしました。

史跡巡りとしては「歩き・み・ふれる歴史の道～潮風香るなぎさを往く～」への協力や、秋の史跡巡り「竜ヶ城(蒲生城)を歩く」を企画・実施いたしました。

また、史跡ガイドとしては、生涯学習講座「始良の歴史探訪」の現地研修ガイドやムーミン講座におけるガイド、森山家見学ガイドなど12月までに14件の依頼がありました。この中には学校からの依頼もあり、子供たちを対象としたガイドも行いました。この他に、歴史民俗資料館における体験学習の補助や展示見学の際の説明など子どもたちとの活動も積極的に行っています。

なお、研修やガイドだけでなく、市指定文化財82か所の巡回点検・清掃活動も行いました。限られた時間内ですが、状況確認や改善箇所の報告、除草などボランティア活動の一環として取り組んでいます。これからも、このような活動を継続して行っていく予定です。

来年度、個人や団体、学校や地域コミュニティなどで始良市の文化財や史跡を巡られる際は、ぜひ、『始良歴史ボランティア協会』をご活用いただければ幸いです。どうかよろしくお願いたします。

※詳しくは、始良市歴史民俗資料館(0995-65-1553)まで、お問い合わせください。



史跡めぐりガイド
ムーミン講座「わが町再発見」



史跡巡回点検・清掃作業
高崎墓地

【編集後記】

歴史は、知れば知るほど疑問が湧いてきます。その疑問を史料からひもといたり、現地調査をしたりして探っていきます。まるで推理小説の探偵になった気分です。

「いつ？誰が？どうして？」と、あちらこちらに落ちている歴史の不思議の種を拾って歩く事は本当に楽しいです。ぜひ、一緒に学び、楽しみませんか。